

カリタス女子中学校 第三回入学試験

二〇二二年二月二日 実施

国語問題

(五〇分)

* 答えはすべて解答用紙に記入すること。

* 字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

次の①～③の——部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の——部のひらがなを漢字に改めなさい。ただし、④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

- | | | | | | |
|---|--------------|---|---------------|---|------------------|
| ① | 私のおじは少し無愛想だ。 | ② | 山の頂が雪でおおわれる。 | ③ | 新しい試みとして歌会に参加する。 |
| ④ | 私をふるい立たせる言葉。 | ⑤ | ちゅうこくに耳を貸さない。 | ⑥ | 紅茶に一杯のさとうを入れる。 |
| ⑦ | 文章にあやまりがある。 | | | | |

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

まず人がいて、自分があつて、そして言葉がある。言葉と人の係わりを言うとき、そうした順序で考えられるのが、まず普通です。ただ、言葉と人の関係について考えるなら、その順序を逆にして考えるほうがいい、とわたしは思っています。まず言葉があつて、自分があつて、そして人がいるというふうに。

この世にあつて、人にとつてなくてはならないと思えるもの、毎日の生活をささえてきたもののほとんどすべてというのは、人がつくりだしてきたものです。人はさまざまなものをつくろうとしてつくってきたし、けつしてつけれないと思われるようなものすら、しばしばつくりだします。けれども、人にとって絶対になくはないものというのは、必ずしも人のつくつたものでなく、言葉もそうです。自分が生まれる前からずつとあつて、言葉は、わたしたち自身より古くて長い時間をもっています。ですから、わたしたちは言葉のなかに生まれてくる。そして、自分たちがそのなかに生まれてきたもつとも古い言葉を覚える。成長するとは、言葉を覚えるということです。つくるものでなく、あつらえるものでない。覚えるものが言葉です。

毎日の経験を通して、人は言葉を覚えます。覚えるのは、目の前にある言葉です。自分の毎日をつつんでいる言葉です。自分がそのなかに生まれてきた言葉というものを、あるいは言葉の体系というものを、自分から覚えることによって、人は大人になってゆく、あるいは人間になってゆく。そういうものが、言葉です。

にもかかわらず、覚えて終わりではなく、覚えた言葉を自分のものにしてゆくということができないと、自分の言葉にならない本質を、言葉はそなえています。

言葉を覚えるというのは、この世で自分は一人ではないと知ることです。言葉というのはつながりだからです。

言葉をつかうというのは、他者とのつながりをみずからすすんで認めるといふことであり、言葉を自分のものにしてゆくというのは、言葉のつくりだす他者とのつながりのなかに、自分の位置を確かめてゆくといふことです。

人は何でできているか。人は言葉でできている、そういう存在なのだと思うのです。言葉は、人の道具ではなく、人の素材なのだということです。

言葉には、おどろばに言って、二つあります。

一つは、他者を確かめる言葉です。挨拶の言葉。手紙の言葉。電話の言葉がいちばんいい例です。電話はだれかにかけるもの、そしてだれかからかかってくるものです。

1、他人なしには存在しない道具です。それに、メディアの言葉。情報の言葉。わたしたちの日常のおおきの言葉は、そこに他者がいる。他者が感じられる、そういう言葉です。あるいは、他者を確かめるための方法としての言葉です。

言葉には、もう一つの言葉があります。自分を確かめる言葉です。ここに自分がいると感じられる言葉、自分を確かめるための、あるいはそのための方法としての言葉です。本の言葉はいつもそうでしたし、今でもそうですが、歌や映画、マンガやドラマも、ただおもしろいというだけでなく、共感したり反発したり、ここに自分とおなじ人間がいる、そこに自分の世界があると感じられる、そうした「私」の言葉でできています。

C 他者を確かめる言葉と、自分を確かめる言葉と、わたしたちがもつ言葉には二つの方向、二つの働きがあります。D 技術革新の大波

がおしよせてきてめざましくすすんだのは他人を確かめる言葉の技術ですが、自分を確かめる言葉の技術のほうはどうかとさえ、本なら本を開いて読む。歌なら、歌に耳をかたむける。映画なら映画館で、2 部屋でビデオを見る。マンガならページを追う。今も、そんなふうにならぬ。E 個人的です。

インターネットのような新しい空間がひろがって、他人を確かめる技術がとんでもなくすすんでも、自分を確かめる言葉のあり方が、だからといって変わってゆかないのは、自分を確かめる方法は心の働きだからです。万事にソリッドさ、堅固さをつくりだしてきた技術革新のあり方とは違って、心というのはかたがたの見える見えないものにすぎません。

心、と簡単に言うことはできても、その心は、人の身体のどこにあるのか。心臓がどこにあるかはわかる。指がどこにあるか、眼球がどこにあるかもわかっています。しかし、心が身体のどこにあるのか。技術が働きかけることができるのは、そこにあるとわかっているもので、それをえたりつくったりすることができ。けれども、心はどこにもないものだから、言葉でしか言えないのです。

そのため技術革新の華やかな時代に疎かにされがちなのは、心の働きです。心の働きとか、あるいは勘どころか魂込めといった訳のわからないものは、もはや時代遅れに見えます。3 流行は、すべてではありません。わたしたちのあいだには言葉でしか言えないもの、言葉でしか読みとれないものが、どうしたってあるからです。

そもそも社会が、現実が、世界がそうです。社会や現実や世界は地図のうえにはないし、これがそうだとも指させない。にもかかわらず、

わたしたちは社会というものがあると熟知しているし、現実というものを【 F 】と実感しているし、世界というものがあるといふことも知りぬいています。

どうやって？ 言葉によって、です。言葉からしか感受できないものがある。そのことをわたしたちに教えてくれるのが、言葉です。

明治から今まで、ずっと勉強というのは、成績をあげ、受験して、競争して、競争に勝つか負けるかという、競うもの、争うものとして考えられてきた勉強です。言葉を学ぶということさえ、そうした競争である勉強の一つであり、※論語も、※シエイクスピアも、競争のなかで学ばれたわけです。

けれどもこれからやってくるだろう、子どもがどんどんすくなくなつてゆくだろう社会において変わらざるをえないのは、そのような勉強というものかたちです。学ぶということが、勝つための、あるいは勝てなかつたら負けてしまうような、競争のための勉強とは違つたかたちをもつことができなくては、先がなくなつてくるからです。

というのも、他人と競争する。他人と競争して、他人に勝つ。あるいは負ける。そのように勉強というものが、つねに他人を確かめる、他人との距離きよりを確かめるようにして行われてきたということがあります。しかし、G子どもがどんどんすくなくなつてゆく社会では、他人に勝つために勉強する必要より、もつとずっと必要なは自分を確かにするための勉強であり、自分を確かめる方法としての勉強がいつそう求められます。

自分を確かにするのになくはならないものは一つだけ。言葉です。自分を確かめるちからをくれるのが言葉です。

肝心かんじんなのはそういう言葉にちゃんと出会えるかどうかであり、問題はそういう言葉と出会えるような言葉との付きあい方を、自分に向く育ててゆけるかどうかですが、ただ言葉は情報とは違います。

情報をたくさんもつてることが物知りと考えられ、情報をたくさん知っていることが世の中を知っていることであつて、情報に通じていなければ遅れているとされるところというのは、知っているか知らないか、情報の量を他人と競いあうことであり、情報のゆきつくところは、すなわち他人との競争です。

しかし、情報がわたしたちを圧倒あつたつ的にとりまいて今のようなとき、弱まっているのはむしろ情報でない言葉です。情報でないもの、非情報的なものというのが、しかし本当は、言葉にとつていちばん大事なもののなのです。

話している人がいる。後でその人が何を言ったか思いだせない。けれども覚えていないのに、その人はどういう人だったかというイメージは、ちゃんとのこっている。つまり、そのように、わたしたちは言葉を通して、すべて理解するのではないのです。話したのを聞いて、情報を得たから知るものではありません。

伝わってのこるものは、その人の表情、身ぶり、雰囲気、気分といった、^H不確かな、非情動的な言葉です。情報によって判断すると思っ
ている事柄のおおくも、わたしたちは情報によってというより、本当は非情動的なものにもとづいて、しばしば判断しています。考える
ときも、わたしたちはおおく情報でないものに重心をおいて、言葉の表すものを測って考えます。

いまは亡ない親しかった人を思いだすとき、その人の言ったことより、思いだされるのは、あのときのあのしぐさであるとか、その人の
笑顔であるとか、ふくれっ面であるとか、あのときのあの眼差まなざしであるとか、そういうほうがよく印象にのこっていないでしょうか。
いまは亡ないおばあさんやおじいさんのことを考えても、一緒に暮いっしょらしたのに、後になって、おばあさんやおじいさんのことはじつは何も
知らなかったことに気づくということだつてすくなくないのです。にもかかわらず、その表情や雰囲気、印象的な一瞬いつしゆんの表情が、忘れら
れない記憶きおくになつてのこっているということがあります。

人の表情は言葉のかたちをもたない言葉です。言いかえれば、非情動的な言葉です。情報でなく、表情によって、その人のことを鮮あざ
かに思いだすことがあるように、わたしたちは情報ではない言葉の意味するものを、判断のとても重要なところに活かすことで、自分自
身を確かめることがすくなくありません。そうした非情動的なものを捨ててしまえば、わたしたちにとっての言葉のあり方は歪ゆがんでき
ます。

言葉を情報とだけとらえると、非情動的なことが見えてきません。意味はあつても文体のない言葉が増殖ぞうしやくしています。知識としての意
味をもちながら、その言葉のもつイメージが生き生きと感覚されない。言葉が文体、スタイルというすぐれて感覚的な魅力みりょくを欠くとき、
言葉に欠けるのは言葉のちからです。

知識だけの言葉は、言葉だけ知つていてもその言葉を感じできない、そういう言葉です。知識としての情報をつらねた言葉、非情動的
な文体を感じさせない言葉がよそよそしくて退屈たいくつなのは、「情報を得ること」と「言葉を読むこと」は、決定的に違うからです。

自分にとつてもつとも必要な言葉は、「言葉」だけを漁あつても、たぶん見つけられないでしょう。見つけなければならぬのは、「必要」

です。

そういうことを考えれば、言葉でいちばん肝心なことというのは、何かそのものを言い表して一つの意味をなすということではありません。「ばか」という言葉があります。「ばか」という言葉は、さまざまに違った意味を表せる言葉です。「ばかやろう」と人にむかって言うときのばか。「ばかやろう」と自分にむかって言うときのばか。「あなたってばかね」と言うときのばか。「ばか言つてらあ」と言うときのばか。「仕事ばか」と言うときのばか。ともすれば「ばか」という言葉は、見下げる言葉とされやすいのですが、実際は違います。「ばかやっちゃった」と言うときのばか、「ばかみたい」と言うときのばかのように、羞はじいや、照れや、親しみを表すものでもある言葉です。だれもべつに意識していなくとも、わたしたちは日常の場面では、そのように、それぞれに意Iをつくして、ニユアンスをいっばいに活用する。そうして、言葉をつつむ非情動的な領域を明るくしながら、コミュニケーションを成り立たせようとしています。

言葉一つでどうにでもなるという言い方がありますが、どうにでもなるかどうかはともかく、「言葉一つ」というのはその通りです。ただ意味を表すだけでなく、ただ情報であるというだけでなく、確かに感じられるものにはならないだろう。そう思うのです。て伝えようという努力がなければ、言葉というものが信じられるものにはならないだろう。そう思うのです。

〈 中 略 〉

言葉は、ふつう表現と考えられています。しかし、本当はそうではなく、言葉はむしろどうしても表現できないものを伝える、そのようなコミュニケーションの働きこそをもっているのではないかとこのことを考えるのです。

言葉というのはその言葉で伝えたいことを伝えるのではない。むしろ、その言葉によって、その言葉によっては伝えられなかったものがある、言い表せなかったものがある、どうしてもこのってしまったものがある、そういうものを同時にその言葉によって伝えようとするのです。

おなじ一つの言葉でも、その言葉でおたがいもっているのは、おなじ一つの意味ではありません。

4

その「社会」という言葉は、車を指して、「これは車です」とか、松の木を見て、「これは松の木です」というふうに、そこにあると指して言うことができます。

「これは社会です」と何かを指して言うことのできない、そういう言葉があります。そのような言葉で言い表されるものというのは、その言葉によってそれぞれが自分の心のなかに思いえがくものことです。

そうした沈黙、そうした無言、そうした空白が体※たしているものが、それぞれに心のなかにもっている問題なのであり、なくしてはならない記憶の確かな目安だからです。

言いたいことを言えば、たがいにわかりあえるだろうというのでなく、何をどう言ってもうまく語れない、言葉がとどかない、たがいにわかりあえないというところからはじめて、自分の心のなかにある問題を、あくまで切り捨てない。言葉を馴なれ馴なれしくつかうことが、言葉に親しむということではありません。

〈長田弘『読書からはじまる』（ちくま文庫）より〉

〔語注〕

- ※ 万事ばんじ……………すべての物事。
- ※ ソリッドさ・堅固けんこさ……………しつかりしている度合い。
- ※ 疎あろそか……………不完全・不十分であること。
- ※ 勸かえどころ……………はずしてはならない大事な点。大切な所。
- ※ 魂たましい込め……………全精力を注いで制作をすること。
- ※ 論語……………中国古代の思想書で、儒教じゆきやうの祖である孔子こうしの教えを弟子がまとめたもの。
- ※ シェイクスピア……………（一五六四〜一六一六）イギリスの劇作家。
- ※ 意をつくす……………考えていることを十分に言い表わす。また、自分の考えが相手によくわかるように丁寧ていねいに述べる。
- ※ ニュアンス……………語や語句のままの意味以外の話し手の感情や意図を示すようなふん囲気、びみような意味合い。
- ※ デイスコミュニケーション……………コミュニケーションが成り立たないこと。おたがいに理解ができないこと。
- ※ 代替だいたい……………他のもので代えること。
- ※ 体たいしている……………大切にし、守るようにふるまっていること。

問一

1 4 にあてはまる言葉としてふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア しかし イ さて ウ つまり エ たとえば オ あるいは

問二

A まず言葉があつて、自分があつて、そして人がいる とありますが、これはどういうことですか。五十字以内でまとめなさい。

問三

B 言葉は、人の道具ではなく、人の素材なのだ とありますが、次の会話文は、この筆者の考えを話題としたものです。これについてあとの(1)(2)の問いに答えなさい。

神野さん 『言葉は、人の道具ではなく、素材なのだ』というの、どうということだろう。』

愛原さん 「人が毎日の生活の中で必要として使うものであるという点では、言葉もへ i 〉のように思えるよね。でも、言葉はへ ii 〉とはちがつて、人が使つて終わりだったり、覚えて終わりだったりするものではなく、『自分のものにしてゆく』ものであるということが、この筆者の主張の意味をさぐるポイントになるのではないかな。」

神野さん 「なるほど。言葉は『自分のものにしてゆく』ものか。じゃあ、自分のものにするというのはどういうことなんだろう。筆者によると、自分が社会の中でどのような位置に立っているか、自分は何者であるのかを、言葉によつて理解していくというイメージかな。」

愛原さん 「そうだね。そして、覚えた言葉を『自分のものにしてゆく』ために、筆者は ◎ (十字以内) が必要不可欠だと言っているよ。なるほどなと思つた。人は、自分と比べる対象がないと、自分が何者かは分からないものね。」

神野さん 「でも、そう考えると、やっぱり言葉は自分を測るためのへ iii 〉のように思えるんじゃないかな?」

愛原さん 「いや、言葉は他の人と自分を比べるためだけにあるのではないみたいだよ。人は ◎ (十字以内) の中で、他の人の発した言葉を見聞きして、その人に対して『その気持ち、分かるなあ。』と思つたり、反対に『そんな風に考えるなんて信じられない!』と思つたりすることをくり返していくことで、少しずつ自分がどういう思いや考えを持っているかを

知り、自分らしさを作っていくらしい。つまり、筆者は、言葉は人の内面を作っていくものでもあると言いたいんじゃないかな。」

神野さん「そうか！言葉は、人が自分で使うだけで終わるものではなく、◎（十字以内）を求めて使うもので、さらに、自分を構成していくものにもなるという点で $\langle \text{iv} \rangle$ であるということなんだね。」

愛原さん「うん。だから、筆者は『人は言葉でできている』と述べ、言葉を人の $\langle \text{v} \rangle$ としてとらえているんだね。」

(1) 神野さんと愛原さんの会話文中の $\langle \text{i} \rangle \sim \langle \text{v} \rangle$ に入る言葉の組み合わせとして正しいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	i 道具	ii 素材	iii 道具	iv 素材	v 素材
イ	i 道具	ii 道具	iii 道具	iv 素材	v 素材
ウ	i 道具	ii 道具	iii 素材	iv 素材	v 素材
エ	i 素材	ii 素材	iii 道具	iv 素材	v 道具
オ	i 素材	ii 道具	iii 素材	iv 道具	v 素材

(2) ◎ に入る言葉を本文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

問四 C 他者を確かめる言葉と、自分を確かめる言葉 とありますが、次のア～オを、①他者を確かめる言葉と、②自分を確かめる言葉とに分け、記号で答えなさい。

- ア うれしかったできごとを日記に書くときの言葉
- イ 友達の誕生日を祝うために打ったメールの言葉
- ウ 行きづまったときにはげまされる名言集の言葉
- エ 演劇部の公演を見て印象に残ったせりふの言葉
- オ 大特価の商品をのせたスーパーのチラシの言葉

問五 D 技術革新の大波 とありますが、「技術革新の大波」の具体例として挙げられているものを、本文中から一語でぬき出して答えなさい。

問六 E 個人的 とありますが、この「的」は、言葉のあとに付いて、「～のような」や「～に関わる」という意味をつけ加えている接尾語です。次に挙げる四つの言葉の * には共通した接尾語が入ります。考えて漢字一字で答えなさい。

多様 * ・ 弱体 * ・ 風 * ・ デジタル *

問七 F 【 】にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア つらつら
- イ まじまじ
- ウ まるまる
- エ ひしひし
- オ きりきり

問八

子どもがどんどんすくなくなくなってゆく社会では、他人に勝つために勉強する必要より、もつとずっと必要なのは自分を確かにするためにする勉強であり、自分を確かめる方法としての勉強がいつそう求められます。とありますが、この部分をまとめた次の文の X Y にあてはまる言葉の組み合わせとして正しいものを、次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

今後さらに少子化が進む社会では、自分を確かめるために、 X よりも、 Y を重視することが求められる。

- ア X 感覚的なもの Y 他者との和解
- イ X 豊富な知識 Y 高度な技術
- ウ X 豊富な知識 Y 感覚的なもの
- エ X 多くの情報 Y 他者との競争
- オ X 感覚的なもの Y 高度な技術
- カ X 他者との競争 Y 他者との和解

問九

不確かな、非情報的な言葉 とはどのような言葉ですか。「情報」という言葉を使わずに説明しなさい。

問十

意をつくして、ニュアンスをいっばいいっばいに活用する。とありますが、あなたが、迷子になって泣いている子どもを見つけたいという場面を想定すると、「意をつくして、ニュアンスをいっばいいっばいに活用する」とはどうすることですか。考えて具体的に書きなさい。

問十一

「これは社会です」と何かを指して言うことのできない、そういう言葉 とありますが、この言いかえとなっている表現を本文のこれより前の部分から十字程度でぬき出して答えなさい。

